

「枯れない泉」

幼稚園の園庭には、大きな水たまりがあります。何度も砂を敷いて、平らにしようと試みたのですが、どうも暗渠の影響なのか、あるいは、地下水の影響なのか、すぐに凹んで水たまりに戻ってしまいます。夏から秋にかけては、アメンボが浮いていることもありますし、トンボが産卵にやってくることもあります。ただ、大きな水たまりと言っても、所詮、水たまりですから、数日で干上がってしまいます。トンボの産卵の様子を見かけた時は、少し残念な気持ちになります。

でも、そんな水たまりは、子ども達にとっては、良い感じの遊び場になります。実は、私としては、砂で埋めてしまおうとしたことから分かるように、この水たまりを苦々しく思っていました。景観も悪いし、園庭は平坦な方が良いに決まっているだろうと。でも、ある外部講師の先生から、「ここの園庭は、良いですね。おっきな水たまりがあって、子どもの遊びの選択肢が広がるでしょう」と言われて、なるほど、そういう考え方もあるのか、と教えられました。それ以来、幼稚園の大きな水たまりは、ちょっと誇らしい水たまりに変わりました。

今は、雪に埋まっていますが、夏の時期、水たまりは、砂遊びに夢中な子ども達の水汲み場になります。食器を洗ったり、ケーキの材料になったり、ジュースの素になったりします。雨が降って深みが増すと、長靴を履いた子ども達が、親と教師の心配を他所に水たまりに駆け込んでいきます。水たまりの中央で立ち止まられると、大人でもその周りからは手が届かないので、そういう状況も子ども達にとっては楽しいようです。まあ、時には、ビショビショに濡れて泣いてしまうこともありますけどね。でも、もう水たまりを埋める気はありません。何なら、もう1か所くらい作ってみようかな、と。雨の日になると、2か所の水たまりを繋ぐ川が現れるというのも、幻の水源み

たいで面白いかも知れません。

子どもの遊びを、色々観察してみると、「水」に関わる遊びって、本当に多いですね。つい先日の話ですが、うちの子ども達が、なかなかお風呂に入らないものだから、空っぽの透明な飼育箱に、目いっぱい雪を詰め込んで、「これで、お風呂で遊んだら」と言ってみると、かれこれ1時間は風呂から出てきませんでした。雪も水の一形態だと捉えるなら、その遊びの可能性は広いですね。冷凍庫でおもちゃを氷漬けにして、お風呂で遊ぶのも、かなりウケが良いそうです。雪は季節限定ですが、氷漬けおもちゃなら、夏でもできますから、もしもお風呂になかなか入らないお子さんに手を焼いたら、試す価値はあるかと思います。

なんて、水遊び、雪遊びのお話をさせてもらったのは、ようするに、いつの時代も、幅広い年齢層で、水場に集まること、水に戯れ、水に癒されることってありますよね、ということが言いたかったわけです。公園に噴水があることも、都市部に川が流れていることも、水辺に遊び場が設けられることも、あと、井戸端で会議が行われることも。古今東西、水場は人が集まり、人が楽しみ、人が和む、そういう雰囲気があります。その辺りのことを詳しく、専門的に考察していくと、途方もない長さの説明になるかと思います。「水」は、人にとって、非常に多面的な意味を持つものですから。長大な研究論文になってしまいます。

ただ、それくらい豊かな意味をもった「水」の湧き出す井戸端で、サマリアの女性とイエス様が出会ったんだという、今日の聖書箇所は、とても大切な場面なのかも知れない、ということは受け止めていたいと思います。

今日の聖書箇所を、ちゃんと整理しながら読んでいくと、ちょっと長くなってしまいそうです。まず、イエス様と会話しているサマリアの女性について。この女性は、ただの女性ではなくて、当時のユダヤ社会にあって、特別な背景のある女性でした。サマリアという出身地、所属は、当時の

正統的なユダヤ人にとって、忌み嫌うべきものでした。詳しい説明は、またの機会にしますが、サマリアという土地は、ユダヤ人が嫌う「混血」の人々が暮らすところでした。民族的純粋性、純血を求めるユダヤ人にとって、サマリアの人々は血の混じった、穢れた存在という認識が、当時がありました。だから、ユダヤ人としてお生まれになったイエス様が、サマリアの女性と話し込む様子は、当時の認識からは、とても不思議に思えたのです。サマリアの女性本人も「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むですか」と問い掛けています。差別される側も、その差別が当然であると思うくらいに、ユダヤ人のサマリア人差別は、徹底していたということです。

そういった背景事情を、全部わかった上で、理解した上で、イエス様は、このサマリアの女性に声を掛けたのだ、ということが、まずは重要な点です。

また、11節にあるサマリアの女性の言葉についても、補足説明が必要です。サマリアの女性は、素性の知れない、ただユダヤ人ということだけが分かる男性に対して、「主よ」と呼び掛けています。この発言は、物語の展開から言えば、かなり不自然なものです。見も知らぬ相手を「主」と呼ぶわけですから、無理が生じています。このことについては、この井戸端会議ならぬ、井戸端会話が、その出来事の正確な記録・報告ではなくて、イエス様が「枯れない泉」をもたらす「我らの主」であることを伝えるための福音書であると理解する他ありません。「イエス様こそ、主である」という信仰理解が、先走り、ほとぼしるが故の、ちょっと理屈を超えた物語である、ということですね。私たちが緻密な物語展開を望むなら、出会ってすぐに「主よ」と呼び掛ける、このサマリアの女性の言葉には、モヤモヤしてしまうかも知れませんが、でも、仕方ない。それが聖書であり、特に福音書である、ということです。

ただし、そういった正しい事実の報告を後ろに追いやった上での、信仰的確信の表明だとしても、

それほど否定的になる必要はないでしょう。私たちは、ノンフィクションの歴史的事実からも大いに学べるし、想像力豊かに創作されたドラマや小説からも、人の心の機微を学び、感動し、自らの人生に活かすことができます。そもそも、意地悪な、捻くれたことを言うなら、8節には「弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた」と書かれています。じゃあ、このイエス様とサマリアの女性との会話を、誰が目撃し、記録したのか、合理的に納得する形で説明することは簡単じゃありません。

以上、細かいけれど、大事だと思われる点を、説明させてもらいました。その上で、「水」の話ですね。

旧約聖書、新約聖書を通して「水」は、湧き出すもの、流れ来るもの、という理解がありました。それは、流動的であり、変化に富むものであり、決して滞留し、淀み、静止しているようなものではなかったのです。冒頭で、水たまりの話をしましたけれど、聖書時代においては、実は水たまりの水や、雨水を溜めた水というのは、あまり印象は良くなかった。もちろん、いよいよ水不足で困ってしまえば、そういう「溜まった水」も利用したでしょうけれど、理想としたのは、湧き出し、流れ来る、動きのある「水」だったんですね。

でも、そういう感性って、なんとなく現代人の私も分かるような気がします。ほら、湧き水とか見ると、ちょっとテンション上がるじゃないですか。源泉かけ流しの温泉とか贅沢な感じがして嬉しいじゃないですか。雨水を綺麗にろ過した飲料水よりも、地下水を処理した飲料水の方が、なんか美味しそうな気がします。ミネラルの有無とか、そういうのも関係しているかも知れませんが。とにかく、湧き水、清流、地下水の方が、なんか良いですね。

イエス様がお与えになる「水」も、そういう動きのある水です。滞留していない、静止していない水。湧き出し、流れ来る水。溜まっているだけの水は、いつか枯れるかも知れませんが、器に欠け

があれば漏れ出してしまうかも知れません。でも、湧き出す水は、もちろん、現実的には有限ですけども、地下水も使い過ぎたら減ってしまいますが、聖書における理解では、湧き出す水は「無限に尽きることはない」という意味を持っています。

サマリアの女性は、水を汲みに来た井戸のことを「ヤコブが与えた井戸」と言いました。ヤコブとは、信仰の父であるアブラハムと並んで尊敬された人物です。ヤコブの別名は、イスラエル。まさに、ユダヤ・イスラエルを代表する歴史上の偉人ですね。そんな著名なヤコブさんが開いた井戸にことを、このサマリアの女性は誇りに思い、その価値を訴えるのでした。

しかし、この訴えに対して、イエス様は「この井戸の水を飲む者はだれでもまた渴く」と言います。このイエス様の発言は、かなり挑戦的、挑発的です。信仰の大先輩が開いた井戸のことを貶めているわけですから、穏やかではありません。けれど、ここにも、この物語の重要な意図が示されています。すなわち、「主イエス・キリストは、いかなる信仰の先達をも上回る」と。何故なら、真の神様の御子であるからです。アブラハムも、ヤコブも、ダビデも、ソロモンも、御子イエス・キリストに比べられる者ではない。そういう信仰理解が、この福音書の根底にはあります。

そして、イエス様が下さる水の、さらに特筆すべき点は、それが、ただ喉に染み込み、消費されるだけではなくて、「その人の内で泉となる」と言うのです。渴きが癒えるどころが、自分が水源地なるという。もちろん、信仰的な意味において、ですが。でも、そういう感覚って、大事にしたいと思います。私たちキリスト者は、すでにイエス様から決して渴かない水を頂いた存在です。時々、そのことを忘れて、渴きを覚えることもあるかも知れませんが、大丈夫、たとえそうなくてもいつか、ちゃんと戻ってきます。あるべき信仰に。絶対。そして、そんな信仰を持つ私たちは、自分の渴きが癒えるだけじゃなく、私たち自身が水源地になって、周りの人たちの渴きも癒すことができる。不可能かと思っても、癒すことができる。少なくとも、聖書には、そう書いてある、と

受け止めていたいと思います。

人が何に渴いているか、なんて分かりません。そして、渴きが癒されたという心地良い状態が、どんな姿なのかも分かりません。教会に通っている、通っていない。お祈りができる、できない。信仰を告白している、告白していない。その違いが、つまり、渴いている、渴いていない、の違いとは限りません。ここにいる皆さんのお陰で、すでに渴きを癒されている人、いると思います。教会に来たり、祈ったり、信仰告白したりしていなくても、皆さんの持つ「内なる泉」によって心地良く生活している人、いると思います。

だから、私たちは、イエス様から頂いている「無限に尽きることはない」という「命に至る水」を感謝して日々、心と身体に染み込ませつつ、私たち自身から湧き出る泉によって、大切な人を、周りの誰かを満たしていると確信していきたいと思います。その大切な人、周りの誰かが、その泉の水に気付いて、感謝して、神様の方に歩み寄るかどうかは、それはもう神様とその人の問題です。私たちは、とりあえず内なる「枯れない泉」を大切にしていけば良いです。

井戸のほとりで、ユダヤとサマリアという分断の壁を超えて和解できたように、私たちもまた、内なる泉を中心とした豊かな水場で信仰の輪を広げ、さらに多くの人たちと共に祈りを合わせる事ができますように。そう祈りつつ、「枯れない泉」として役割を担って参りたいと願うものであります。

お祈りを致します。

神様。今日は、積雪の多い中、無事に私たちを、この礼拝堂へと招いてくださり、感謝致します。

あなたは、このように雪を降らせ、雨を降らせ、豊かな水を、この地上にお与えになります。そして、その水は、地下水となり、湧き水となり、私たちの身体の渇きを癒します。そして、私たちには、もう一つ尊く、嬉しい水があります。御言葉を通して与えられる水、心の渇きを癒し、枯れることのない水です。今日も、この礼拝を通して、豊かな水を飲ませて頂き、感謝致します。どうか、今日から始まる 1 週間も、主が備えてくださる水に生かされて歩むことができますように。そして、私たちの隣人へも、その潤いと豊かさを分け与えることができますように。お守りお導きください。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。